

は、年代による傾向はある程度みられるが、三分野間での関連性は特に際立ったものはないといえるのではなからうか。

## (2) 地域認識・授業実践の動向——『歴史地理教育』の記事内容から

次に、実際の教育現場では太平洋地域に関し、いかなる関心や授業実践があったのか。『歴史地理教育』（歴史教育者協議会）の記事内容を追うことでその内容をみていきたい（付表4）。同誌に着目した理由としては、1950年代から継続的に太平洋地域についての記事が掲載されており、たびたび特集なども生まれ、教育現場における太平洋地域に関する関心と動向をある程度把握できると考えたからである。

まず、1970年代までの記事内容からみていきたい。1954年9月には、同年3月1日におきたビキニ事件に関連し、「原水爆と教育」の座談会記事が載せられている（2号）。そこでは原水爆の問題を教育でいかに取り上げればよいか話が話されている。その中で太平洋地域については、「原住民は一段低い人種と思っているのではないか」、「マーシャル群島については今の米国だけでなく、かつての日本が何をしたかについても考えねばならぬ」<sup>13)</sup>といった発言がみられたが、その後関連した記事は続かない。1960年代では、上原専祿が講演のなかで、太平洋諸島の独立と民族の主体について言及しているが（102号）、そのほかのまとまった記事はみられない。太平洋地域関連の記事が増えてくるのは、1970年代に入ってからである。1977年3月には「太平洋—その歴史と地理」の特集が組まれている。そこでは前述した吉村らにより、太平洋地域の重要な話題として第五福竜丸や当時の日本の資源開発の問題が論じられている（261号）。その中で槐一男は、「ミクロネシア認識は緊急の課題であり、日本人にとって太平洋認識の要である」<sup>14)</sup>と述べている。

1980年代になると、ミクロネシア諸島では独立や非核にむけての動き

が活発になる。1979年発布のミクロネシア連邦憲法や、1981年発布のパラオ憲法にはそれぞれ非核条項が盛り込まれて制定された。こうした動きを取り上げた石渡延男や吉田豊らの記事が掲載されている。また、1987年12月には臨時増刊号(421号)が出され、同誌のこれまでの太平洋認識の動向がまとめられている。この時期ミクロネシア諸島では、独立や非核化の動きとアメリカの軍事戦略の間で、激しい交渉が行われており、結局パラオ憲法の非核条項は、アメリカと自由連合協定を結ぶことで停止状態となった<sup>15)</sup>。1980年代末の槐による連載記事は、こうした政治情勢と当時の最新の研究成果を取り込んで書かれている(444-446号)。

以上のように1970、80年代をとおして、太平洋地域に関する記事は増えており、政治情勢の変化もあり地域的な関心は高まってきているといえるが、授業づくりや授業実践報告に関するものはまだ少ない。そのなかで飯塚利弘は第五福竜丸を題材にした授業実践を1970年代から発表している。

次の1990年代は、太平洋に関わる特集として「世界の先住民」(510号)、「太平洋の人々と日本・世界」(550号)、「ハワイ併合100年」(580号)があげられる。このなかで「太平洋の人々と日本・世界」は、1977年3月に続きミクロネシアを含む太平洋諸島を取り上げたもので、非核の動き、アジア太平洋戦争、企業進出などを特に日本との関わりから考える記事が掲載されている。一方、授業づくりや授業実践報告の記事にも変化がみられる。吉本健一は太平洋の島々を教える際の視点として、日本との関係、非核憲法、ミクロネシアの課題、経済自立と援助のあり方など幅広い観点を提示している(550号)。また石出みどりの報告は、ハワイ併合の背景から日本・沖縄との関係までを掘りさげ、観光だけではないハワイを考えさせる授業実践である(580号)。

2000年代は、2004年3月の特集「第五福竜丸被災五〇年」を中心に、

第五福竜丸関連の記事，授業実践報告が多くなる<sup>16)</sup>。そして2011年3月11日の東日本大震災と原発事故の発生により，放射能被ばくの問題が重大な関心事となり，水爆実験による第五福竜丸被災，マーシャル諸島ビキニ環礁の被ばくの問題があらためて注目されるようになる<sup>17)</sup>。ちょうどこの時期は第8次学習指導要領改訂により，地理的分野で「オセアニア」を含めた「世界の諸地域」の学習が復活することと相まって，増刊号「どうする？ 中学地理学習」，「3.1と3.11ービキニとフクシマ」が組まれている。大野一夫（787号）や滝口正樹（817号）の授業づくりの記事には最新の原発情報が載せられている。2010年8月1日には，マーシャル諸島のビキニ環礁がミクロネシア初の世界遺産に登録されたことも話題となり，「負の遺産」をどう引き継ぐかを考えさせる契機となっている<sup>18)</sup>。

全体として1970年代以降，時々話題を反映しつつ太平洋諸島に関する記事は継続されているが，そうした関心が授業づくりや授業の実践化に十分結びついていない，というのが教育現場での実情ではなかろうかと思われる。

#### 4. 太平洋地域学習の授業実践事例

前章でみた授業に関する記事のうち，飯塚利弘の授業実践報告と吉本健一の授業づくりの視点を取り上げ，その特徴を見ていきたい。

##### (1) 第五福竜丸被災を軸に——飯塚の授業実践報告

飯塚利弘の授業実践報告は1970年代と80年代に3本の記事が掲載されている（付表4参照）。そのうち太平洋地域を扱った1981年6月（322号）の「三・一ビキニと太平洋諸島」の内容をみていこう<sup>19)</sup>。これは1980年2月，焼津の中学2年生を対象にオセアニアの授業（オーストラリア，ニュージーランド，太平洋）うち，太平洋の学習についての授業報告であ

る。おそらく地理的分野であろう。授業時数について記載はないが、内容からみて2時間扱いであろうと思われる。授業内容の構成をまとめると次のようになる。

## I. 太平洋の島々の歩み

1. “南の楽園”から“島ぐるみの墓場へ”→(写真を見せた後)「…こうした島々にいつ頃から人々が住みつき、どんな生活を送っていたのだろうか。またその太平洋の楽園の島々が、どうして“島ぐるみの墓場”にされたのだろうか。」<課題1>

・**資料**「太平洋の島々の歩みNo.1」(1)太平洋世界の成立(大航海者ポリネシア人)、(2)ヨーロッパ人の侵入、(3)帝国主義時代の太平洋、(4)太平洋戦争と太平洋)

2. 死の太平洋→「どうして太平洋は“死の太平洋”になりつつあるのだろうか。またそれは、具体的にどんな状態になることをいうのだろうか。」<課題2>

・**資料**「太平洋の島々の歩みNo.2」(前田哲男『棄民の群島』からの文章、各大洋と陸地の面積の割合の円グラフ、ミクロネシアの要図、重要な基地、太平洋での核実験回数)

3. ビキニ水爆実験→「白地図の“オセアニアの歩み”の中に“1954年ビキニで水爆実験が行われる”とある。このことと焼津は大きな関係があります。いろいろ調べてみよう。」<課題3>

・**資料**(1978年9月5日付の朝日新聞記事(「死の島ビキニついに無人」、第五福竜丸乗組員・見崎吉男さんの談話)

## II. 太平洋の島々の住民の自治への動き—パラオの非核憲法 (以下、略)

この授業のねらいは、「死の島(傍点は原本付き)にされたビキニの人々の問題を、焼津の中学生としてもっと実感をもって受けとめ」<sup>20)</sup>で考えられるようになることにあり、<課題3>が中心であることがわかる。授業は、資料⇒説明→課題提示→話し合い⇒意見発表→感想、という流れになっており、生徒が「調べる」「話し合う」「意見を述べる」といった活動場面が多い。特に使われている資料は、地図、新聞、専門書、証言などからつくられており<sup>21)</sup>、生徒が考えたり、意見を出したりする活動の土台となる豊富な資料の活用が、この授業を支える特徴となっている。

## (2) ミクロネシアの全体的理解——吉本の授業づくり

吉本健一は1996年7月に特集号(550号)のなかで、「現代「太平洋」と日本の授業づくり」を発表している(付表4参照)<sup>22)</sup>。吉本は高校の教師だが、記事には、授業づくりの際の対象の校種や授業時数、どの教科で扱うのかといったことは記載されていない。おそらく、太平洋諸島を扱うどの校種でも、どの教科のどの項目のところでも、授業をつくる際の参考として考えてほしいと思ったのではないか。提示された視点は次のようなものである。

### I. 太平洋の島々の何をおしえるのか

(1) 太平洋諸国と日本 (2) 非核憲法は、いまも教材となるか (3) ミクロネシアの課題

### II. 太平洋諸国の経済自立と援助のあり方

(1) 伝統社会の維持と近代化のバランス (2) 経済的自立の難しさ (3) 日本の援助はどうあるべきか

吉本は、「授業ではミクロネシアなどを中心に太平洋の島々がどのような過程で〔独立〕を果たしていったのかを旧宗主国との関係でとらえていくことが大切である」<sup>23)</sup>と言っている。Iの(1)では戦前の日本との関係を、地図を使って位置関係を認識させたいと、具体的なイメージをいだかせるような資料を使うことが有効であるという。それが戦後の〔独立〕とその後の自立への困難さの要因を考えることにつながるとする。戦前と戦後を結びつけて考えさせ、そして、「土地を奪われ続けてきた歴史のなかで「平和」を希求する住民たちの強い思いが形成されていったことを押さえない」<sup>24)</sup>と授業づくりのねらいを述べている。

飯塚の授業実践と吉本の授業講想は、取り組んだ時期が異なり、また授業のねらいにもそれぞれ特徴があり、教科書に準拠した典型例とはいえないであろう。しかし、授業者の意図は明確であり、現代において太平洋諸島地域の授業化を考える際の一つの参考になるであろう。そのほかミクロ

ネシアを含む太平洋地域の授業実践事例は、『歴史地理教育』以外にもいくつみられる<sup>25)</sup>。こうした実践事例などから、中学校社会科でミクロネシアを中心に太平洋諸島地域を理解するために重要だと考える学習内容として次の5点をあげたい。すなわち①伝統文化と現在の暮らし・産業、②戦前日本の支配地域であり、アジア太平洋戦争の戦場と化したこと、③戦後アメリカによる原水爆実験の被ばく地となり、第五福竜丸やその他漁船が被災した地域であり、④アメリカからの独立と非核化の動き、そして⑤地球温暖化による環境破壊の問題、である。これらを含む太平洋地域の内容が三分野の中でどう関連づけられるかを考え、提示した。詳しくは図1三分野の全体関連図を参照。

## 5. おわりに——今後の課題

以上見てきたように、本稿では太平洋諸島地域の学習の重要性を指摘し、中学校社会科の教科書記述や教育雑誌上の記事内容を追いつつ、社会科三分野のなかで太平洋地域学習がどう関連づけられるかを考えた。太平洋諸島地域は現代の問題を考えるうえで見落とせない地域であるといえるが、現実的には授業に多くの時間を取れないのが実情であろう。しかし、限られた授業時数のなかでも三分野全体のどこで、太平洋諸島に関するどの事項を取り上げればよいのかが見通せれば、関連性がつかめ、授業づくりの視点も明確になるのではないだろうか。三年間の学習を通して、一定の太平洋諸島に関する認識を持てるようになることがねらいである。本稿はこうした太平洋地域学習の教材化、授業化へ向けての第一歩であり、今後、授業実践を通してさらに検証していくことが課題となる。

## 注

- 1) 吉本健一「ミクロネシアをどう教えたか」地理教育研究会『地理』Vol. 41, 通巻 492 号, 古今書院, 1996 年 11 月, p. 147。
- 2) 太平洋地域において核実験場となったのは, アメリカによるマーシャル諸島のビキニとエニウェトック両環礁, イギリスによるポリネシアのクリスマス島およびフランスによる仏領ポリネシアのムルロア環礁であった。
- 3) 吉岡政徳監修『オセアニア学』(京都大学学術出版会, 2009 年, 序 i) では, 「広大な海, 太平洋に点在する島々……それらに大陸であるオーストラリアが加わることで, オセアニアが構成される」とある。
- 4) 吉村徳蔵「歴史のなかの太平洋」『歴史地理教育』261 号, 1977 年 3 月, pp. 5-6。
- 5) 鈴木亮「太平洋世界史認識」『ちからを伸ばす世界史の授業』日本書籍, 1987 年, 同「太平洋人の「太平洋戦争」」『アジアの「近代」と歴史教育』未来社, 1991 年, 同「わたしたちにとっての太平洋」『フィリピンと太平洋の国々』青木書店, 1995 年など。
- 6) 鳥越泰彦「『世界史』が排除してきたもの—戦後世界史教科書の分析」『越境する文化と国民統合』東京大学出版会, 1998 年, p. 215。
- 7) 読売新聞 2007 年 9 月 1 日付。
- 8) 前田朗『軍隊のない国家』日本評論社, 2008 年, p. 86。
- 9) 第 3 回「核兵器の人的影響に関する国際会議」が 2014 年 12 月 8 日, 157 ヵ国の代表団が参加してウィーンで開催された。このとき初めて核保有国 5 大国のうちアメリカとイギリスが参加した。
- 10) 川崎哲『核兵器を禁止する』岩波ブックレット, 2014 年, p. 86。
- 11) 第 3 回「核兵器の人的影響に関する国際会議」では, アメリカの「核の傘」の下にいる日本政府は, 核兵器禁止条約に対し「時期尚早」との消極的な立場であった(「日本政府と被爆者に温度差」朝日新聞 2014 年 12 月 12 日付)。
- 12) 例えば, 『オセアニア世界の伝統と変貌』山川出版, 1987 年, 『地域からの世界史 17—オセアニア』朝日新聞社, 1992 年, 『オセアニア①~③』東京大学出版会, 1993 年, 『世界各国史 27 オセアニア史』山川出版, 2000 年, 前掲書『オセアニア学』2009 年, 『オセアニアを知る事典』平凡社, 1990 年などから, オセアニア地域の研究の進展がみられる。
- 13) 『歴史地理教育』2 号, 1954 年 9 月, p. 50。
- 14) 同上誌, 261 号, 1977 年 3 月, p. 26。
- 15) これに関しては, 小林泉『アメリカ極秘文書と信託統治の終焉—ソロモン報告・ミクロネシアの独立—』東信堂, 1994 年に詳しい。
- 16) 被災 50 年と 60 年の節目に第五福竜丸平和協会から, 『写真でたどる 第五福竜丸』2004 年, 『第五福竜丸は航海中』2014 年が出された。
- 17) 第五福竜丸のほかにも被ばくした漁船は多くあった。詳しくは, 高知県ビキニ水爆実験被災調査団編『もうひとつのビキニ事件 1000 隻をこえる被災船を

- 追う』平和文化，2004年，山下正寿『核の海の証言 ビキニ事件は終わらない』新日本出版社，2012年を参照。
- 18) 2012年7月には，パラオ諸島の「ロックアイランド群と南ラグーン」が世界遺産として登録された。
  - 19) 飯塚のそのほかの教育実践書としては，『私たちの平和教育』民衆社，1977年，『パシフィック・オーシャン』かもがわ出版，1996年がある。
  - 20) 『歴史地理教育』322号，1981年6月，pp.28-29。
  - 21) 同上。
  - 22) 吉本のそのほかの授業講想としては，前掲論文『地理』Vol.41，がある。
  - 23) 『歴史地理教育』550号，1996年7月，p.34。
  - 24) 同上。
  - 25) 例えば，二谷貞夫『世界史教育の研究』弘生書林，1988年，荒井正剛「中学校の事例「太平洋の島々」」『新社会科授業論』教育出版，1992年，梅津通郎「授業実践 中学でオセアニアをどう教えたか」，および榎本勝己「授業実践 最初の授業で扱う太平洋」『知っておきたいフィリピンと太平洋の国々』青木書店，1995年，などがある。